

商品經濟觀の見直しをめぐる一試論

小林 彌六

はしがき

ある意味では平凡なことかも知れないが、学問の進歩はどのようにして可能になるのだろうかと考えることがよくある。数多の領域にわかれている種々の学問について、その歩みを綿密に検討したわけではないので周到な吟味をへたうえでの思索というわけではない。しかしその手順をへたのちでなければそのような問題について考えたり発言したりすることができないというのでは、科学史を専攻する者でなければ、そのような問題について種々論議することがはばかられることになり、またいきおい発言も遠慮されることになりかねない。当然に、論議する人々の範囲が狭く限定されることになる。他の圧倒的多数の人々はそのような問題に正面から取り組むことをしない、しかしそれぞれの領域では絶えず研究が進められる。もちろん研究が行われるからには、この問題も事実上はなんらかの形で考慮されていることになるのである。ただそのばあいでもそれが余り意識的に行われていないとか、突きつめた考察が行われぬということが多いだらう。たとえそうであっても、学問研究は進行しているのだからそれでよいだらう

という声もあがりそうである。また筆者の胸中でも一面ではそれでよいように思われないこともない。とはいえ反面、このテーマは種々の分野の研究に携わる多数の人々の心のなかで、絶えず反趨されてほしいと考えられるのも事実である。

そのようなわけでなんとなく不得要領の感があるのを免れない、また十全の用意があつてのことといふのでもない。しかしこの問題について可能な範囲で考えてみることは案外大切ではないかと思う。そこで以上に述べたような事情を前提したうえで、以下は今考えられることをたまたま記すということである。学問の発展は先行する研究の蓄積・堆積の上に行われるのが自然であり、また望ましくもある。そのことは従来の研究によって明らかにされた事柄に対する改善が行われて研究の発展がみられるばあいが多いことを意味する。そのばあい改善にもいろいろあつて、大筋、根幹は従来明らかになつており、これに対する枝葉の部分にあたる改善であるものがある。例えば燃料として石炭を利用するにあつて、直接に燃やす方法もあるが他にも燃やし方にはいろいろ工夫の余地があろう。液状にして燃やす方法も考え出される。このような改善とくらべて、あらたに電力をエネルギー源として利用する方法が発見され採用されることは、同じ改善といつてもその発展のあいだに質的な違いがあるといつてよいであらう。根幹にかかわる改良・改善もあれば、枝葉にあたる部分をめぐるそれもある。どちらの価値も適切に評価されねばならないことは当然として、両者のあいだの違いについても研究に携わる者は常に心しなければならぬであらう。枝葉にあたる部分の改善を積み重ねていけばかならず根幹にあたる部分の飛躍的な進歩・改善に結びつくといふものでもないことも十分に留意しなければならぬであらう。馬車をいくら改良しても新幹線列車にはならない。これらの間には超えられねばならない幾つかの飛躍的な改善、進歩、根幹にかかわる質的な転換が行われねばならぬのである。

研究は過去の蓄積のうえに立って着実に行われねばならない。それは大切であるにしても、ときに従来の成果を根幹から吟味し、可能であればその見直し、転換が図られる必要もある。そのことを忘れないことは、研究に携わる者にとって欠かせられない心掛け・態度であるといっても過言ではないであろう。その意味では瑞々しく柔軟な感受性が学問研究にとって大切な要素なのである。こう書くと、それは当然のことのようでもある。しかしまたこのことはしばしば忘れられがちでしかもこれを忘れないようにすることがときになかなか難しい営為にあたることがある。部分的な改良・改善の地道な努力も大切である。そのことを認めるのに吝かではないが、なおかつ根幹にあたる部分の吟味も怠ってはならぬのではないか。その反復が当初は予期されなかったような大がかりな研究水準のシフト、視座の転換を生み出すことがあるかもしれない。そのような可能性を拓くことに一度、背を向けてしまうと、その瞬間に学問は柔軟性を失い、発展のスピードがはなはだしく落ち、魅力を失うということがあるかもしれない。つねにそうであるといいきれないにしても、そのようなことがありうることを念頭に置かなければ、人々は進歩の可能性を自ら狭める結果に陥ることがあるであろう。学問研究には視座の転換、根幹にあたる部分への問いかけ、従来疑う余地のない自明の事柄とされてきた命題についてときに捉われることなき立場から吟味し直してみる努力をすることが大切なのではないか。その試みが行われることによって、在来とは根本的に変わった新たな学問的・文化的な世界・風景がくつきりと浮び上がってくるかもしれない。そのことが乾きかけた人々の心に潤いを与え、人々を魅惑する力をもつに至るかもしれない。それはなかなか一朝にして成らないかもしれない、しかし過去においてもこのような営為が文化・学問を塵惑に満ちたものにする大切な要素であったことを忘れてはならないであろう。このようなことを書き進めてくると、

「すべては疑いうる」

というマルクスの名言（筆者が教えをうけた鈴木鴻一郎氏の愛用の章句である）がはしなくも想起されてくる。たしかにこれは今もなお科学・学問の進歩をめざす者にとって示唆に富む輝きに満ちた言葉なのである。強靱な批判精神と旺盛な創造精神との根強い息づきがそこにはたしかに感じとられる。

一、交換経済の諸側面

この論稿で試みたいと考えているのは、商品経済あるいは市場経済は一体どのような性格の経済活動であるかを、もう一度原点に立ち戻って考え直してみることである。このテーマにたいし経済学はすでにさまざまな角度から解答を与えてきたといつてよい。しかし今またこの問題の根元に迫る問いかけを發する必要があるのではないかと痛感される。もう少し端的に言えば、これをめぐり従来いわば動かしがたい命題として考えられてきた見解をもう一度吟味してみる必要があるのではないかという問題意識がある。ところで近代のあるいは現代の経済学の対象とする事象のかなり大きな部分がなんらかのかたちで市場経済・商品経済と絡まっている。このことからすれば、この問い直しの作業は経済学にとっても小さからぬ問題となる、あるいはそのような問題に發展する可能性を秘めているということも、ゆるされるであらう。

(1) この問題への第一次接近として、商品交換あるいは交換関係に絡まるいくつかの事実について考察することから始めよう。ある物を他の物とひきかえに譲渡する、商品を他の商品と交換するという行為についてどのような事柄・特徴が發見できるであらうか。

まず指摘できることは、これらのたがいに譲渡されあう物については持ち手がいるということである。持ち手があ
るからこそ、一方の物が他の物とひきかえに譲り渡されるのであるし、また他方の物もこちら側に譲り渡される。持
ち手がいなければ譲り渡されるということもないし、先方の物入手するのに先方の持ち手の判断をおおぐ必要もな
ければ、その代償としてこちらが持っている物を提供する必要もない。空気のように無主の物であれば、交換とい
う行為をつうじて入手する必要はない。もちろん交換されるからにはその物にたいするなんらかの評価があり欲望があ
る。そのような立場に置かれる物——物といえば種々の物質が多いだろう。しかし特殊な物質といえるサーヴィスや
無形の物ともいふべき権限や名譽のようなものも含まれる——がなければならぬ。しかもそれらの物にたいする支
配権を持つ者がいなければならぬ。占有権を持つ者がおり、さらにすすんで規定すれば所有権を有する者がいな
ければならない。たんに占有権だけを持つ者はその物を全面的に譲り渡すことはできない。ばあいによっては占有権に
は変化がなく、所有権だけが移転されることもある。いずれにせよさまざまな物が所有される、その限りにおいてそ
の物の支配をめぐり他の者が排除されるということがあはざるはずである。したがって私的所有が存在することが多いと
いえよう。一般に私的所有と交換関係、商品経済との関係は濃い。しかし商品交換にはつねに個人的な所有が前提さ
れているとは限らない。共同体全体の所有物が交換されることもある。複数の人間がある物を所有することもあ
るし、組織体が所有することもある。物が交換されるとき、個人的に私有されているとは限らない。

(2) さらに当然のことといえるが、交換によって物が譲渡されあうということは交換当事者の間の平和的な関係と
して行われることが多い。このばあい他の人あるいは共同体が持っている物が欲しいと思っても、先方の意向・意志
にかかわりなく力づくで取り上げる、掠奪・収奪するということはない。異なる人間集団の間、共同体と共同体との

間で、欲しい物の入手は力づくで、つまり掠奪したり収奪したりするのが何百万年にわたる人類史のなかでのごく普通の方法であったといつてよいであろう。有史以来の人類の歩みをふり返ってみると、人間集団と人間集団あるいは共同体と共同体との間の暴力的な争い・戦争によって充たされているといつてよい。社会形態が種々の変遷を辿りながらも、そのような事情については余り変化がないことに、奇異な感じを受けるくらいである。

しかしこのような事実に接して当惑を免れないのは、われわれが人類—人間を一般の動物とはどこか違った高級な生き物であるという先入観をもっているからではないか。そしてその角度から人間の歩み・歴史を見ることに原因があるのではないか。このような考え方がどのような事情からまた何時頃から発生したかは、興味津々たる論点である。今は凡その見当を記すほかないが、近世以降のヒューマニズムが人間たる所似を理想化したまた美化してきたということができるかもしれない。ヒューマニズムが人間の良い側面に注目しその面を重視し、その全面的開花を求めたことはもちろん大きな意義がある。宗教改革や市民革命にみられるようにそのことは社会制度の改善・変革を生みだすものでもあったし、人間という一種の動物を他の動物とは非常に異なる生物として洗練・改良する努力を促すうえでも大きな役割を演じた。しかしこのことは人間があるいは人類が、あるがままの姿において一般にイメージされがちなように美質に富む美しい生き物であることを意味するものではないはずである。近世・近代の人間観にはややもするとこの点をめぐり大きな誤解が紛れ込む傾きがあったことを否定することができないように思う。それだけ人間は人間自体の認識・自覚において甘くまた樂天的であったことにもなる。

一例をひいてみよう。マルクスは近代社会にみられる人間性の「疎外」に鋭く注目した。類的存在としての人間は本来は美質に富んだ「人間的な」存在であったと考えられている。ところが人間は往々にして私有財産制や種々の制

度により歪められて生きることを強いられている。いわば疎外された状態にある。これが青年マルクスが到達した特筆すべき、またある意味では純粹で理想主義的な若者にふさわしい人間観であった。また、その後のマルクスの人間観・世界観にもこのイメージが色濃く投影されている。

「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間の本質の現実的な獲得としての共産主義。それゆえに、社会的すなわち人間的な人間としての人間の、意識的に生まれてきた、またいままでの発展の全成果の内部で生まれてきた完全な自己還帰としての共産主義。この共産主義は完成した自然主義としてⅡ人間主義であり、完成した人間主義としてⅡ自然主義である」(『経済学哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波書店、一三〇頁) 疎外されていない自然の状態の人間が「人間的」な存在であるのだと、どちらかといえば理想化されて把えられていると違って間違いないであろう。歴史の歩みとともに人間が歪められてきた面があることは事実である。しかし、人間性の本来の姿が、「人間主義」・ヒューマニズムに象徴されるような愛情その他の美点に富んだ理想的な状態にあったとみなせる保証はない。近代社会において人間が種々の点で不足な生き方を強いられていることはたしかに厭うべき事実である。だからといって、原始の社会においては人間が、理想化されて捉えらる意味で「人間的」に生きられたわけではない。その時代に人間は「人間的」な面もあったとはいえ、多分に動物的な生き方を強いられ、ある点からいえば他の動物以上に動物的に生活をしていたともいえる。これは「人間的」とは何か「人間」とは何かという問題にも関わってくる事実である。他の機会に詳論するつもりであるが端的にいえば、人間は本来的にはマルクスが上記でイメージしていたように友愛・他者にたいする愛情に満ちた平和的な生き物ではないようである。自我愛・他の集団にたいする憎悪、手段を選ばぬ攻撃性など強い性向を持っている。

通常いわれる意味での「人間的」な側面もあるけれど、「非人間的」な側面をそれよりずっと多く、根強く持っていることを自覚しなければならぬであろう。⁽¹⁾ 上記のマルクスの人間観の形成は近世のヒューマニズム（社会主義もその延長上にある）が多いの思潮の中に位置しての出来事であるといえる。また他面では今日程に人間そのものについての科学的な研究の蓄積が当時はまだ見られなかったことにもよる。したがって人間論が未成熟であったことでマルクスを責めることは余りできないだろう。しかし今日の水準においてはマルキシズムに人間論の面での限界があることを、社会主義・マルクス主義に強い関心を持つ人々も直視することを避けてはならないのではないかと考えらる。

ところで共同体と共同体とを繋ぐ方法として交換関係、商品交換は非常に重要でありしかも特徴的な性質をもつといえる。それがなければ異なる共同体の間は分離されたままで繋がれない面があり、したがって相互間の交流が妨げられる。収奪・戦闘・戦争という方法が共同体の接触のごく普通の型であったことも否定できないけれど、このばあいには一方の利益は他方の損失であり、それだけが接触の唯一の方法であつたわけではない。贈与⁽²⁾など他の方法もある。その中で特筆すべきものが交換による方法であり、これはどちらかといえば強制によらず平和的に行われることが多い。その点で侵略・収奪・戦争という血腥い交流方式の対極にあるといつてよい。この点に着目すれば、交換方式による共同体間の接触の重要性がはっきりするのである。交換方式が人類の歴史を平和的にする方向に貢献した——共同体・人間間の信頼関係の支えになり——ことが多いこともあながち否定することはできない。この点にかんしては、共同体と共同体との接触は共同体にとって避けることが難しい事柄であつたのかどうかという問題が関わりがある。別の角度からいえば、共同体は本来は自足的な存在である、他の共同体との接触は稀れであり本来的にはなくて

もよいもの、あるいはないものと考えられるかどうかという問題がクローズ・アップされてくる。

「古代アジア的とか古代的などの生産様式では、生産物の商品への転化、したがってまた人間の商品生産者としての定在は、一つの従属的な役割、といっても共同体がその崩壊段階にはいるにつれて重要さを増してくる役割を演じている。本来の商業民族は、エピクロス（エピクロス）の神々のように、またポーランド社会の気孔のなかのユダヤ人のように、ただ古代世界のあいだの空所に存在するだけである。」『資本論』①岡崎次郎訳・大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、

一〇六頁）マルクスはこのように書き——またそのような考えを持っており——好んで孤島でのロビンソンの生活（とくに経済生活）について語った。マルクスにはどちらかといえば共同体の経済的存立のためには、本来は他の共同体との交換関係は不要だという考え方が強かったように思う。しかしこの考え方は吟味を要するのではないか。人間が交換することを習得しなかった前はともかくとして、ある程度の知能をもち他の共同体との接触を経験するようになる、人類はおそらく有史以前から交換行為を行うようになっていたのではなからうか。交換のようなならぬ方法で自らの共同体にないもの——例えば塩、金属etc.——を入手する必要は時の経過につれてしだいに強まる傾向にあったのではないか。ある共同体には多量に手に入るものが他の共同体ではなかなか入手できないというような事実が知られるようになると、不足する物を交換によって入手しようとする試みが行われるようになったのではなからうか。そして交換がおこなわれるようになったケースが沢山あるのではないか。侵攻や掠奪が実に頻繁に起こったのにも、財貨や資源の偏在や過不足というような事実が関係していたことが少なくないように思われる。共同体の存立にとって交易のような他との外的交流は、元来は不必要であったとはかならずしもいきれぬのではないか。以上は主に経済的な観点からみたのであるが、政治的・軍事的・社会的な観点からみれば共同体は他の共同体とさまざまな機

縁からじつにしばしば接触する。というよりはそれなしにすませること接触を回避できることは、ごく稀れにしかありえないのではないか。一方が他方を征服するか放逐するか、共同の敵に向かって協力して対抗するかそのケースはさまざまであつても、共同体間の接触が避けられないことが多い。するとそれが契機になつて互いの状態について知ることができるようになり、どちらかといへば平和的に交易が行われるようになることもある。財貨の交換・商品交換は共同体にとつてごくまれな出来事ともいえないし、不必要な行為ともいえない。どちらかといへば共同体の存在を支えるかなり重要な要因であつたといえそうである。

交換関係は共同体と共同体との関係として、またそれらの友好関係を支える、暴力等の強制と離れて話し合い相談、契約などによつてもとり運ばれうる、かなり重要な行為であつたといふことができそうである。

- (1) 一例として、E・D・ウィルソン『人間の本性について』岸田二郎、思索社、今西錦司『人間社会の形成』
- (2) K・E・ポールディング『愛と恐怖の経済』公文俊平訳、佑学社

(3) 交換がどちらかといへば暴力あるいはある種の心理的圧力なしにも実行されうるということはつぎのようなことを意味する。交換の当事者はそれぞれ自由な立場でどの財とどの財を交換すべきか、またそれらの比率はどの程度が適当であるかを考え判断することができることが多い。そのためには当事者にある程度の知能・言葉・数量の観念などが備わっていないならぬことはいうまでもない。もしそれが充たされているとすれば、当事者達のあいだで交換行為の成立に先立ち、一方が他方にたいし命令できる立場にあるとか、同一共同体の成員であるとか、互に旧知の間柄であるとかという類の条件は必要ない。互いに交換の意志があり合意が成立すればよいわけであるから、どちらかといへば権力的な支配・被支配の関係がなく平和な状態のほうが交換が行われやすい。交換の当事者は「自由、

平等……」でありうる。この事情はマルクスによって大變に的確につきのよう活写されている。

「……彼らは、自由な、法的に対等な人として契約する。契約は、彼らの意志がそれにおいて一つの共通な法的表現を与えられる最終結果である。平等／＼なげならば、彼らは、ただ商品所有者として互いに關係し合い、等価物と等価物を交換するのだから……」（『資本論』①二三〇頁）

交換行為が基本的には「自由、平等」な当事者間で行われることは、それが種々の社會關係の中でもひとときわユニークな性格を有するものであることを示している。マルクスが指摘するとおり財の交換あるいは商品の交換には、財の必要性や価値の判断にもとづいて行われる財の交換をとおして人間と人間との關係がとり結ばれるという、人間の社會關係としての間接性あるいは被媒介性が見られる。ところが血縁共同体をはじめとする共同体の中では人間と人間との直接的な繋りが最初にあり、それに支えられて社會關係がとり結ばれるというのである。たしかにこの点は重要であろう。ただ念のために指摘しておくなら被媒介的・間接的な人間關係は財の交換・商品交換だけに見られるわけではない。地縁共同体・國家共同体の結束が、治水・治山とか外敵からの自己防衛というような必要を一つの要因として固められていることもある。氏族・種族共同体あるいは各種の教団・宗派が共通の神・信仰・象徴などを手掛りにして、その成員の結束を保っていることもある。人間の集團・共同体・組織などが殆んどすべて直接的な人間關係によって形作られ維持されているとは断定できない。

また間接的・被媒介的な人間關係だからといって、人間が社會生活を営むために不適当な方式であるとは限らない。それはともかく交換が当事者間の「自由・平等」な立場で成り立ちうる關係だということは、じつは特筆に値する事實なのである。端的に言って、それぞれの個人が人格的に自由な存在でありかつ平等であるような社會あるいは

時代が、いつどこにあったのであろうか。有史以来のさまざまな時代が大部分、階級・階層の分化を大きな特徴とする社会によって占められていたということは、このような自由な個人と平等な人間関係をもつ社会が殆んど存在しえなかったことを示している。階級社会に転化する前の原始社会ではどうだったのであろうか。このばあい共同体の内
部で、長老とか祭祀を司る神官とか呪術師などによる他の成員の支配あるいは管理が行われていなかったかどうか。はたしてすべての成員が平等でありえたか大いに疑問が残る。親子・男女関係についても同じような問題が残ろう。かつてしばしば考えられがちであったように、原始社会ではすべての成員が平等であったかといえ、その可能性は少いというのが事実に近いであろう。少くともこのような社会で確たる平等性が貫いていたという保証はないであろう。さらにこのような未開の社会では人間が生存することは共同体の営みのなかでのみ可能であるという状態であったと推定される。「あの古い社会的諸生産有機体は、ブルジョアの生産有機体よりもずっと単純で透明ではあるが、しかし、それらは、他の人間との自然な種族関係の臍帯からまだ離れていない個人的人間の未成熟か、または直接的な支配隷属関係かにもとづいている」(『資本論』①一〇六頁)とマルクスも指摘している。人間は集団から離れて生きられず、共同体の存立と必要が先行する。集団的な生存に埋没して、集団とは一応区別されるものとして個々人の人間的存在が認められ、彼等がまた諸権利の主体として社会的に認知されるということは余りなかったと解されよう。各個人の「自由」はがいして存在しなかったといえるであろう。したがってまた「自由・平等」な個人たちによって原始の社会が構成されていたとは解されない。

このように考えてくると、財貨あるいは商品の交換関係によって結ばれる人間の関係が「自由・平等」でありうるということは、特別な意義をもつ事実であることが判明する。人間の生き方にとって、人間社会のあり方にとって交

換關係がきわめて特異な意義をもつことをこのことは強く示唆する。

(4) 交換の当事者にまえてもって一定の關係が必要とされないとしたこと、交換に関心をもち合意する人々の間であれば交換が行われるということは、交換が非常に広い範圍にわたって行われる可能性を与える。交換の担い手は同一の共同体に属す人々である必要はない。同一の地域に住む人々である必要もなく、民族を異にし、言語を異にし、信教を異にすることも少くない。交易、交換關係は共同体と共同体との間を連結するという性格が濃いということも関連して、非常に広い範圍に拡大していく傾向がある。交換の發展は一般にその媒介物であり一般的等価物である貨幣を生み出す。すると貨幣の流通によって商品交換・商品流通がますます広い範圍に拡大し、人々の欲望も多様化し根強くなる。「私的交換は世界商業を、」(『經濟学批判綱要』I高木幸二郎訳、大月書店、八〇頁)と述べられるように商品交換の關係は根強い擴張の傾向、普遍化の傾向を持つている。他の社会的な紐帶、社会の組織原理はこのような根強い拡大性・普遍性を持たないものが多い。血縁共同体、地縁共同体、領主制、奴隸制等にしても通常は限られた妥当性をもつにすぎず、ある定められた範圍を超えては広がりえない限界をもっている。古代ローマ帝国やアジアの諸帝国に見られるように、国家的な支配もかなり大きな膨脹力を持ちはする。しかしこの膨脹が基本的には武力による征服・威圧に頼るものであるため、自ら限られた範圍を超えられない。なかなか世界的な広がりをもつものとはなりえない。世界帝国というように、世界的という名辭が付される事例はいくつかあるけれど、真にグローバルなものはない。多分に主觀的な側面があるといつて誤りではないだろう。たまたま非常に広大な版圖を確保しえたにしても反乱・分裂・他国との戦争などでそれを維持することはなかなか難しい。世界の諸地域が相互に繋りを持つようになり、その意味で眞の世界史が成立するになったのは、近世以降の世界商業の發展やアメリカ大陸の発見、資

本主義的生産の確立を基礎にする世界市場の拡大・成熟などによってなのである。このことは交換経済・商品経済がもつ特有の普遍的な性格を象徴している。

(5) 交換経済・商品経済の特徴としてその自動調整力を挙げることができる。交換される財・商品の価値が測定されるには、財貨ないしは商品の所有者による主観的判断だけでは不可能である。実際に交換が行われることにより、——貨幣が用いられるばあいには——それらが客観的にどのような価値・交換能力を持つかが決定され、測定される。いわば商品(財貨)の価値が尺度される。ところで同一種類の商品が繰り返し交換されるばあいにどうなるか。前回と同じ交換能力・価値を持つものとして扱われることはごく稀れであろう。その商品をめぐる需要と供給とが前回とくらべて変化するのが普通だからである。前回の取引で交換比率ないしは価格がある水準に定まる。するとこれを基準にして一方では供給の増減が起こり、他方では需要の増減が起こる傾向がある。価格が比較的に高いと普通供給は増え、需要は減る。その結果、他の条件が一定とすれば価格は前より下がる。すると次回は需・給の変動がより緩やかになる傾向がある。このような交換が反復されると価格はしだいに安定的な水準に接近することがある。なんらかの事情で需給がそのように変動することが妨げられればともかく、そうでなければ、またその財ないし商品に適度と考えられる交換能力があるばあいにはそうなる。つまり繰り返し交換が行われることによってその商品の標準的な価格がしだいに明らかになる。これも貨幣の価値尺度機能の一つの側面である。このことは反面次のような事実があることを示している。交換・売買の反復をつうじ供給と需要とが均衡する方向に向かって調整されるのである。通例、財貨あるいは商品の供給と需要がそのときに均衡する量を保つという保証は存在しない。しかし商品売買の反復、貨幣による購買の反復にともない起こる需給の変動は、市場機構が社会的な需給のバランスを回復する方向に

はたらく調整力を備えていることを示している。交換の当事者がそのことを意識して行動するわけではないが、全体の動きが結果としてそのような働きをしている。

これを自然経済と比較してみよう。自然経済・計画経済では需要に対し生産・供給を意識的に釣り合わせようとする努力が行われる。それでもつねに過不足なく供給できるという保証はなく、現代のように経済の規模が驚くほど巨大化するとその困難は非常に大きくなる。それにそれぞれの財貨について需要の如何を合理的に決定しまた的確にその大きさを捕捉することはなかなか容易ではない。頭の中で考えたと自然経済・計画経済が均衡を維持するのは比較的容易な事柄と解され易い。「社会的な生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的・計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである」(『資』①一〇六頁)というのは、一面の真理をいいあてている。ただし上述の事情もある。効率性・経済性をも含めて考えると、市場経済的な自動制御の力がはたらかないだけに、計画経済・自然経済の方が交換経済・商品経済ないしは市場経済より需給のバランスを保つうえで優れていると一概にいえない面がある。巨大な規模の社会で構成員の意欲が低下しないように経済計画を立てるためには、おそらく民主的な方法で意志・計画の決定が行われねばならないであろう。そのためには、おそらく政治的な民主化が徹底化されていなければならぬであろう。ところが今日までの社会主義圏の経験から判断できるとおり、この条件を確保することは並大抵の事業ではない。生産手段の大規模な国有化が実施されても、政治・社会・経済など諸方面での民主化が達成されねばならない。大規模な社会での合理的な経済均衡の達成は、観念的に考えられているほどにはたやすくはない。

(6) 交換経済成立の動機は、多くのばあいその担い手の利己心にもとめられる。

二、交換経済・商品経済にたいする伝統的な評価の仕方

(1) スミスとマルクスの商品経済観

以上の論述をふまえて商品経済・市場経済の性格をどう評価すべきかの論議に移るまえに、これまでそれがどのようなものと理解されてきたかをふり返っておくことにしよう。ここで筆者が念頭に置いているのは主にマルクス経済学・古典派経済学の系譜である。

A・スミスは「或る物を他の物と取引し (truck) し、交換し (barter) 交易 (exchange) する傾向」(『国富論』(一)小泉訳、岩波書店三八頁) というように、交換を人間本来の性向にもとづく行為、社会の内的な傾向の発現として扱えた。このことはよく知られている。それについて、マルクスならびに彼以降のマルクス経済学は全く反対の方向から接近し、この問題を理解してきたといつてよいように思う。

交換は「私有財産」を基礎にし「利己心」を動機とする倒錯した社会行為なのだといっているのである。「分業と交換とは、類に適合した活動および本質力としての人間的な活動と本質力との、明らかに外化された表現だからである」(『経済学・哲学草稿』一七四頁) このようなマルクスのアプローチはその後もほぼ一貫しており、『資本論』で説かれている商品の物神性もその延長上に位置するといえる。私有財産制と結びついて行われる私的労働にももたらされる労働の社会性の貫徹は、その生産物が生産者のあいだで商品として互いに交換されること、またそれらの商品が価値をもつということに反映される。そして商品を生産するのに必要とされる人間労働が、その価値という形態を採

るといわれる。ここで商品が価値をもつということは、人間の労働が個々別々の私的労働として行われるという倒錯した事情を反映する形態であると考えられている。このような商品物神の理論は、財貨の商品形態や交換が人間や社会にとって本来のものではなく倒錯的な性格のものなのだということを含意している。そのような理論の前提として、人間の労働は社会の構成員のあいだの計画・合意などを前提に直接的に社会的な性格を持つものとして行われるべきである、生産物も直接的に人々あるいは社会の所有に帰し使用・消費されるべきなのだという判断が採られている。当然に交換や商品は人間・社会あるいは財にとって本来のものでない倒錯的なものなのだ、という判断が動かしがたく据えられている。繰り返すまでもなくこれはA・スミスと全く対蹠的な見方である。さらに交換、商品経済の歴史的な位置づけをめぐる彼の見解もそれに対応している。

「すべての労働生産物、力能、活動の私的交換は、個人相互間の上位下位の位階的關係（自然のおよび政治的）のうえにうちたてられた分配に対立しているとともに（そのような分配のばあい本来の交換は、ただ併存するにすぎないか、あるいは大体において、異なった共同体のあいだで始まっているそのわりには全共同体の生活をつかんでいないし、一般にいっさいの生産關係、交易關係を征服してはいない）（この上位下位の位階的關係がとる性格は、すなわち家父長的、古代的、あるいは封建的である）、生産手段の共有的な領有と規制との基礎のうえに協同している諸個人の自由な交換とも対立している」（『経済学批判綱要』高木幸二郎訳八〇頁）。マルクスはまた先に引用したとおり『資本論』でも、「商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で始まる」（『資本論』I—一八頁）としている。それがもとも「異なった共同体のあいだ」の關係として発生したという側面を重視しており、「従属的」な關係にとどまることが多いとみなしている。

(2) 宇野弘蔵の商品経済観

マルクスの学説を継承するマルクス経済学ではおおむねマルクスの見解に沿うかたちで、交換・商品経済の性格が理解されてきたといつてよいであろう。詳しい検討は紙面の関係もあるので別の機会に譲ることにして、ここでは近年のマルクス経済学を活性化するのに功績が大きかった宇野弘蔵の商品経済観に触れておくことにしたい。

「勿論、経済学の研究対象をなす商品経済は、すでに述べてきたように、また何人にも知られるように、資本主義に先だつ諸社会においても、それらの社会の基本的な経済の方式とは異質的なものでありながら、それを補足するものとして多かれ少かれ行われてきたのであった。もともと商品経済はマルクスのいうように共同体と共同体との間の生産物の交換から発生したものであって、それはいわば物によって人間の社会関係を拡大するものとして、漸次に共同体に分解的影響を及ぼしつつその内部に滲透していったのであった。」

これは『全書版経済原論』いわゆる新原論の序論に見られる文章である。商品経済をどう見るか、「商品形態」をどう掴むかは、「流通論」を重要な要素とする原理論の構成にとって大きな影響があり、ひいては原理論・段階論・現状分析論の全体によって形作られるとされる経済学体系の内容にも大きく関わってくる。資本主義社会がどのような性格の社会と解されるか、その止揚形態とされる社会主義社会がどのような仕組みをもつものと解されるかの方向もそれによって規定されてくる面がある。

引用文から知られるとおり、宇野氏の商品経済観は大筋においてマルクスの見解を受け継いだ内容になっている。マルクスが冒頭の商品論で価値の実体を説き商品経済の倒錯性を商品物神論で説いたのと異なり、価値実体の論議を排除した流通論において「商品形態」について説くという方法をとっているが、商品経済が本来あるべき経済方式と

「異質なもの」であることをマルクスよりもさらに明確に説こうと努めている観もある。商品を「商品形態」と捉え、商品・貨幣・資本を「商品・貨幣・資本の流通形態」として捉える見地においても、それらが財の本来あるべき姿と違うことをシャープに摘出しようとする指向の跡がうかがわれる。マルクス経済学の合理化・科学化に努められた宇野氏のばあいにも、自然経済・実物経済・計画経済が本来あるべき経済の方式であり、交換経済・商品経済はこれとは「異質」の好ましからぬ経済の方式、ありていにいえばなくてもよいものと考えられていたといつてよからう。⁽¹⁾

(1) ちなみに大内力氏は「商品交換なるものは、もともとはマルクスもいうように、共同体と共同体との接触するあいだに生ずるのであり、いわば世界の隙間に生ずる関係である」(『大内力経済学大系第二巻、四頁』)と述べておられる。日高普氏は「商品はけっして資本主義社会だけに特有な存在ではないが、特殊歴史的な存在であり、……あるいは「商品という特殊な形態」(『経済原論』)とされる。また「商品経済自体がそれらの社会体制にとつて異質かつ外来的なものであり」(桜井毅・山口重克・佐美光彦・伊藤誠『経済学Ⅰ』有斐閣、三頁)とされる。おおむね共通に商品経済の外来性・異質性・特殊性を強くとする見方がとられてゐる。

三 交換経済・商品経済の評価をめぐる発想の転換が必要ではないか

——自然経済と商品経済

以上に述べたような商品経済観がこれまでマルクス経済学ひいてはマルクス主義・社会主義の潮流に支配的であったことにたいして、今日では原点に立ち戻って見直しをしないだろうか。この点がこの論稿の主題として意識されているテーマである。

交換経済・商品経済は本当に「異質なもの」なくともよいものだろうか。別の面から考えてみよう。共同体あるいは社会は本当に交換なしに存在できるのだろうか。すでに述べたようにそれぞれの地域での資源の偏在、財の偏在、他の共同体の成員との婚姻、遊牧民族の他の種族との接触の必要、共同体間の平和的な交流の必要等の諸種の事情のために、人類史のかなり古い時代・有史以前から共同体間の交換が行われていたのではないか。歴史時代にはいつから今日に至るまで交換経済・商品経済を欠く社会というものは少く、あったとしても例外的といってよいであらう。これは経済史上の事実によって確定しなければならぬことであるが、例えば新約聖書の時代の古代イスラエルでも「農夫たちは彼の畑とその家畜の群れからの産物によって生活していたのであり、家族と共に耕作していたのである。日常の他の必需品は村のあるいは近隣の村の技術者たち、陶工、織物工、大工、石工、鍛冶工によって請け負われていた」⁽¹⁾。当然に地域でも交換が行われていた。また地域間、共同体間でも交換が行われていたと解するのが自然である。古代エジプトでも、大規模な外国貿易が行われていたし、地域内でも小規模な取引は行われていたとみられる。⁽²⁾ 歴史上の事実は、ウェーバーが指摘するように、「純粹なる形態における実物経済はつねに稀有の例外に属する」⁽³⁾ というのが実状に近いのではないかと思われる。

人類が他の動物に非常に近い生活をしてきた原始時代は別として、知能の発達・手の使用、言葉・文字・道具の使用などがある程度まで進んだ段階では交換が行われるようになるのが一般的な傾向であったらう。そのさい交換はあつてもなくともどうでもよいものだったわけではなく、共同体間の関係においてもまたしばしば共同体の内部においても大切な行為だったのではないか。前述のとおり共同体間では有無相通じあう平和的な交渉の方法として大切であつたらう。その関係はおのずから相当の広さにまで及ぶものでありえたであらう。共同体の内部でも神官・技工など

が現われることと関連して、ある程度の交換が行われるようになることは十分ありえたであろう。交換経済・商品経済は基本的な経済関係を「補足するもの」として、かなり重要な意義をもつものであったことを認めなければならぬであろう。

これまで商品経済観を決するうえで非常に大きな役割を演じてきた、商品交換が「共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる」というマルクスのテーゼ——丁度、スミスのテーゼの逆転されたもの——はどうだろうか。それがかなり真実をいいあてていることは認められるにしても、共同体の内部で交換が始まることも全くないといえぬであろうし、もともと複数の人間が共同生活をするということはさまざまな面での「交換」を離れてありえない⁽⁴⁾といつてよい面がある。このテーゼからだちに商品経済は無用のものなくもがなものであるということにはならない。それが「補足するもの」「ただ併存するもの」であるにしても必要あってまた存在理由があつて営まれてゐることが多い。資本主義社会ではこれが一変して社会の基本的な紐帯になつてゐる。これは歴史的にも大変めづらしい事実であり、この社会では経済活動が——他の諸種の活動とは一応は別——基本的に商品や貨幣さらには資本などを要素にして組み立てられるものになつてゐる。そして宇野氏が強調されるように商品関係によつて「その基本的関係たる資本家と労働者との関係を結ぶ」⁽⁵⁾社会となつてゐる。このことはたしかに資本主義社会が社会の本来のあり方と「異質」な仕組みをもつ社会であることを示すといつてよい。労働者（人間）が生活するのに自分の労働力を自主的な判断にもとづいて使用することができない、その成果についても自由にできない、生産物の一部しか取得することがゆるされない、賃金も変動し、失業もあるということは不自然であるといふほかない。しかし今問題になつてゐる資本主義社会のこの矛盾ははさしあたりは「労働力」さえも商品化されているという事実にもとめられねばなら

ない。これを「商品形態」がすべてをつらぬく基礎要因になっており、その「商品形態」がもともと不自然な倒錯したものであり「異質なもの」であることによると判断することがあるとすれば、その理解は吟味し直す必要を残しているのではないであろうか。すでに述べたように、交換・商品経済は自然経済・実物経済あるいは計画経済とは異なるけれど、あってもなくてもよいもの、「異質なもの」不合理なものとは限らないからである。それは殆んどすべての時代にかなり重要な役割を演じてきたのであるし、かりに資本主義社会が変革されて社会主義になるにしても交換・商品経済がまったく無用のガラクタになってしまうという保証はない。革命後数十年後の今日でもそれが消失しないということは、既成の社会主義の未成熟からきているのか、それとも、社会主義になるとそれは無用になり消失すると考える構造になっていた従来の経済理論に欠陥があったのであろうか。どちらにしても、後者の経済理論の構成され方についても再吟味の必要が生じているのではなからうか。問題の核心は次の点にあるといえよう。自然経済・実物経済は人間社会にとって自然の本来的な経済方式である。これに対して交換経済・商品経済はそれとは「異質」の「外的」な不自然なものである。従来、自然経済と商品経済の性格をめぐって立てられてきたこのような命題は、今日でもなおあらためて検討し直す必要がないほどに正当性を主張しうるのであろうか。

手掛りを得るために自然経済・実物経済の性格について考えてみよう。共同体・社会を構成している人々は協力して(かなりのばあいに職能の分担をしながら)労働し、生活に必要な財貨・サービスを生産したり、配分したりして生活している。それらの活動をするのにどのような方法によってどのような方針で行うか等の意志決定・計画の作定がなされなければならない。それは氏族・種族・村落共同体のように、成員の協議・合意、あるいは従来からの仕来りによって行われることがある。そのさいにどのような品物がどの位必要でまた労働できる者が何人おり、原料

や労働用具・家畜・田畑などがどの位あり利用できるかなどがあらかじめ判かっている必要があり、それを手掛りにして計画が樹てられる。計画の作定と実施は社会（個人をふくむ）の経済活動の全般に及んでおり、その点ではマルクスが「人々が彼らの労働や労働生産物にたいしてもつ社会的関係は、ここでは生産においても分配においてもやはり透明で単純である」（『資』——〇五頁）と述べていることがあてはまる。

ただここでよく考えなければならないのは、このようにわび目分量で行われる経済活動にはさまざまな面で違いが生じうること、労働や資源の利用面で効率性を欠く傾きがないかということである。あるいはまた需要が合理的に決定され正確に測定されうる保証があるかというような事柄である。中世以前のごく小規模な共同体が人間の主たる社会生活の場であったケースについても、このような懸念がある。まして資本主義の時代以降の国民的あるいは世界的な広がりをもち以前の何千倍・何万倍にあたるというほどに規模が膨脹した社会生活においては、このような懸念はぐんと強まるはずである。このような巨大スケールの経済は商品経済・資本主義経済であるからこそ自然に形成されかつ維持され、比較的には齟齬も少なく運営されてきたと見られる面がなくもない——恐慌・投機などのロスもありはするが。このようにかつての社会単位からすると目がくらむほどの大スケールの社会も、社会主義社会に組み換えられると資本主義よりもっと合理的にロスも少く運営できるようになるはずだという理論が社会主義の角度から永く唱えられてきた。

「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである。」（『資』——〇六頁）一口に「意識的計画的な制御」といっても、何億人、何千万家族・何万の企業を含む社会経済の合理的な計画の作定と

円滑な実施ということであつてみれば、商品経済的な自動制御力を欠くだけにじつは容易ならぬ難事業なのである。人々の必要を正確に反映しムダの少い経済運営をすることが非常に難しい課題であることは社会主義諸国の経験（実験）から今日ではよく知られるようになってゐる。「透明」「意識的計画的な制御」という言葉はたしかに透明でスッキリしており、大まかに観念的には、計画経済化・社会主義化ですべてがさっぱりと解決されそうな印象が持たれがちである。しかし社会経済の構成要素が無数といつてよい程に増えているため、それらの実情を正確に捕捉することは技術的にも大変に困難である。さらにそれをふまえて全面的な経済計画——労働に対する報酬・消費財と生産財の生産比率やそれらの成長率、消費と蓄積の比率の決定等多くの事項が含まれる——を社会構成員の全員の意見が的確に反映される方式で作定しかつ実施するとなると非常に困難を伴うことが多い。

その原因はどこにあるのだろうか。歴大な情報を収集・集中しそれを利用して計画を作定するには、それに必要な知識・技術を有するテクノクラートと設備・機器などを要する。億をこえる社会構成員がそのプロセスに実質的に参加することは不可能事に近い。もっともこれにかわつて無数といつてよい人々の意見をこの作業の進め方に反映する社会的な仕組みができればよい。それがあれば経済の民主的な運営がある程度可能になるということも認められよう。ところがこのような仕組みができるかどうかは、通常は人々の経済生活の社会的なあり方如何によって独自に定まるものではありえない。経済の社会的運営が経済的な側面からだけ決まる傾向があるのは資本主義社会だけである。それとても、現代にみられるように他の政治的・社会的な要因が介入することを避けられない。上述の大規模経済では経済運営の方式自体が社会の政治的・社会的な仕組みと連動・交錯するかたちになっているケースが大部分である。ところが社会の政治的運営にも、経済面に似た問題があるうえに、政治特有の権力・強制力をめぐる闘争がつき

纏いやすい。元來、政治權力のすべての個人の間への均等な配分ほど難しいことは少い。それが人々の身体・行動・思想・富への強制力を有するものだけに、この問題が人類の上に落してきた弊は大きい。富の偏在以上に大きいといつて決して誤りではないだろう。

暴力・その他のさまざまな方法での人々に対する強制が、そのような強制力を有する人々に対して与える満足感・利益が存在するかぎり、またそれが大きければ大きいほど、このような政治力・支配権を獲得することに心を奪われる人間が現われる。権力闘争は社会の規模が大きくなり富も増えるほど激しくなるといふ傾向があるだろう。では時代をずっと遡っていくとどうだろうか。すべての成員が平等で自由な社会が永く存続していたのだろうか。マルクスも「古い社会的諸生産有機体」は「他の人間との自然的な種族関係の臍帯からまだ離れていない個人的人間の未成熟か、または直接的な支配隷属関係かにもとづいている」(『資』一〇六頁)と述べている。少くとも各種の權利を大幅に認められる自由な個人はなかなか現われなかったであろう。また両性間の関係、他の共同体とのあいだの激しい闘争、首長、家族間の隔差などから推定されるとおり機会があれば不平等・支配・被支配関係が生じる強い傾向があったのではないか。このことは究極的には人間という生物に本來的に組み込まれている攻撃性・支配欲などの遺伝子情報に結びついている面もあるう。かつてしばしば考えられがちであったように、人間は本来は全的に平和的で理性的な(いわば通常の意味での「人間的」)生き物であったとはみないのではないか。むしろ実際はおおむねそれと逆の生き方をしてきた生物ではなかったらうか。各種の科学・学問の蓄積からも、おそらくは人間観の根本的な切り換えが今は迫られるのではないだろうか。⁽⁶⁾ともあれ、通常社会主義化で想定されている大スケールの社会で政治的な民主化を達成することがそもそも可能なのだろうか。少くとも大変に大きな困難を伴う事業であることだ

けは自覚しなければならぬだろう。したがってそれと連動しがちな経済運営が「透明」に民主化され、「人間の意識的計画的な制御」の下におかれるということは、頭の中で想いえがかれる観念としてはたやすいようで、実際にそれを現実化しようとすると思わぬ障礙もあかなか難しく、事態は大変に不透明でかつ混沌としやすい。筆者はもちろん社会主義の可能性を信じるものであるが、安易な取り組みですまないことははや自覚されてよいであろう。

社会主義についても他の社会形態でも自然経済・実物経済・計画経済であるからといって、すぐさま人間・社会にとって好ましく、それがつねに基本的経済関係であるべきだとは、なかなか速断しかねるのである。これをそのように速断する考え方が多くの人々の固定観念になっていることはなかったであろうか。

ここまで考えてくると、交換経済・商品経済に対する見方の転換の作業もかなり見通しが立つようになってきたであろう。これまで商品経済は「異質なもの」「外的」なもの、エゴイズムと私有財産の所産、「無政府性」と悪い面の評価ばかりが支配的であったといって、決して誇張でない位である。私利の追求が交換の動機であるという命題はたしかにかなりの的を射ている。ただそうでない友好のしるし・友好の絆としての交換もあるし、結果としては等価交換ギブ・アンド・テイクで無理のないやり方で互いにサーヴィスするという面もあることは否定できない。「無政府性」による不均衡からくるロスもあるが他方で自律的な回復力がはたらく面もあるし、貨幣を単位とする計算可能性を具有していることもあり、効率性・経済性で優れている面もある。それだけではない。(一)の部分で記したとおり、交換経済は大変な広域にわたる経済活動を結びあわせる紐帯になりうるという性質をもっている。それが歴史的には強力な「文明化作用」をはたしえたことも鮮烈な事実である。さらにそれには自由で対等な人間関係——身分制・階級・階層制と対蹠的な——によって支えられるものであることや、また、その展開が近世以降においては疑

う余地なく、また古くはギリシャ・ローマなどの古典古代においてさえ、権利義務の法的関係を精緻に紡ぎ出したりこれと重なる権利義務概念の鮮やかな析出をもたらしたことを看過することはできない。商品経済は人類史の中で特筆に値する出来事として、他に例をみない影響力を発揮し、個人とその権利・義務関係——共同体の未成熟な個人と大変異なる——を生み出したのである。商品経済——各種権利の主体としての個人、という対応関係をはじめ、上述のような一連の事柄を先入見を抜きにして今一度じっくりと見直してみる必要を、現代の世界史の重い歩みは人類に要求しているように思われる。こう述べるとおそらく商品経済を免罪すると、資本主義のさまざまなマイナス面が見失われはしないかという疑問が生じよう。この点について一言しておくことは資本主義経済あるいは資本主義社会の内部に商品経済が広がっていることが、そのさまざまなマイナス面の根本的理由ではないということを理解することが決定的に大切であろう。商品経済の発展の中で生み出される資本の価値増殖運動や労働力の商品化、資本家による労働者の搾取などの一部の事実がじつはマイナス面の温床だったということが今こそ直視されねばならぬのではないだろうか。

(1) 並木浩一『古代イスラエルとその周辺』一五一頁。

(2) コットレル『古代エジプト人』酒井伝六訳、一八二頁。

(3) M・ウェーバー『一般社会経済史要覧』(上)黒山巖・青山秀夫訳一四頁。タルコット・パーソンズ『社会類型——進化と比較』至誠堂も参考になる。

(4) マルクスも次のように述べている。「生産手段の共有的な領有と規制との基礎のうえに協同している諸個人の自由な交換とも対立している」(『経済学批判綱要』1、八〇頁)。人々が協力して生きるときには、さまざまな「交換」——同時的な相互交換とはかぎらない、また交換だけで共同体の協同生活・協力関係が支えられるといいきれぬのも事実であるが——がいろいろな意味で大きな要素になっていることは認めねばならない。

- (5) 宇野弘蔵著作集一巻、二三頁。
- (6) 人間とは何かについては近年さまざまな学問領域からの意欲的な追求が行われている。その成果によって従来はつきりしなかった諸点が大変に良くわかるようになってきている。社会科学もその成果を十分に吸収しなければならぬだろう。たとえば、前掲E・O・ウィルソン『人間の本性について』岸由二訳、思索社。H・カラン『動物の行動と人間の社会』寺嶋秀明訳、海鳴社。
- (7) 既成の社会主義については拙著『資本主義と社会主義』御茶の水書房、拙稿「現代社会主義が生き残る道」(『朝日ジャーナル』一九八〇年二月一九日号)、「ネオ・データントか冷戦か、ソ連社会主義の選択」(『道』一九八二年三月号)、「データントと冷戦の綱引き」(『道』一九八二年三月号)などを参照。

追記 本稿で提起した見方は考えようによってはしごく当然といえるし、また非常に特異であると映るかもしれない。思考の活性化が起こり、このような見方がごく自然に広く受容されるようになる日が早く来ればよいと願っている。

一九八二年九月三十一日